

升天祭聖体礼儀

単音聖歌譜



注意 譜面中、五線譜上に ||o|| とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈祷文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

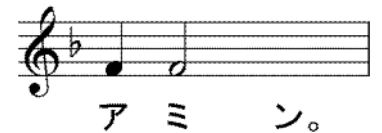
2020年 5月28日 作成

2024年 6月 3日 改訂

釧路ハリストス正教会
管轄司祭ステファン内田圭一

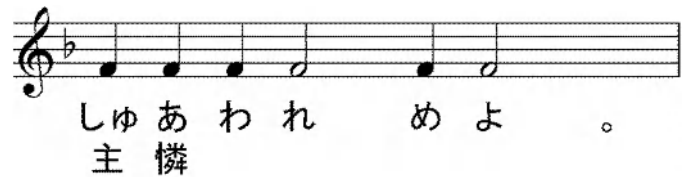
司祭) (黙誦：われら ^{われら} ^{かみ} ^{なんぢ} ^{こうえい} ^{うち} ^{てん} ^{のぼ} ^{せいしん} ^{つかわ} ^{やく}
 て、門徒を喜ばしめ給えり、彼等爾の祝福に依りて、爾が神の子、世界の
 贖罪主たるを確められしに因る。至と高きには光榮神に歸し、地には平安降
 り、人に恵は臨めり、至と高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人に恵
 は臨めり、主よ、我が唇を啓けよ、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす、)

司祭) 父と子と聖神の國は崇め讃めらる、今も何時も世に、

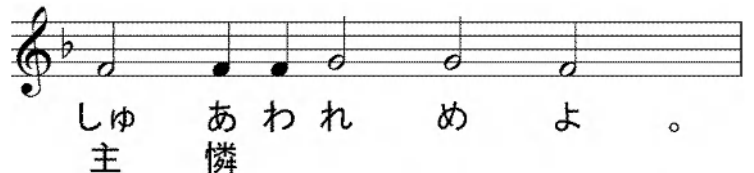


【 大聯禱 】

司祭) 我等安和にして主に禱らん、



司祭) 上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、



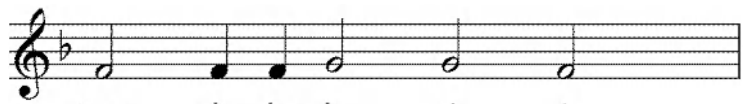
司祭) 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、



司祭) 此の聖堂、及び信と慎と神を畏る心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、

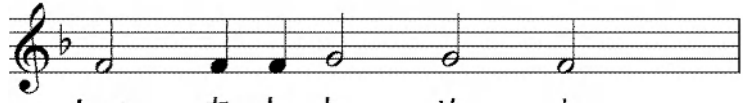


司祭) 教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、司祭の尊品、ハリス
 トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



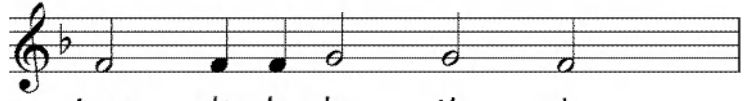
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) わがくに てんのう およ くに つかさど もの ため しゅ いの
我國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



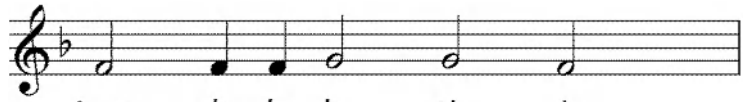
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) こ まち およそ まち ちほう ため およ しん もつ こ うち お もの ため しゅ いの
此の都邑と 凡 の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



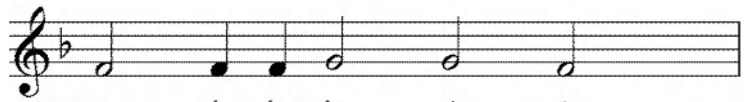
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) きこうじゅんわ ごこくほうじょう てんかたいへい ため しゅ いの
氣候 順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



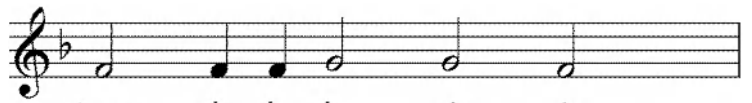
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) こうかい もの りょこう もの やまい うれ もの かんなん あ もの とりこ もの およ
航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び
かれら すくい ため しゅ いの
彼等の救の爲に主に禱らん、



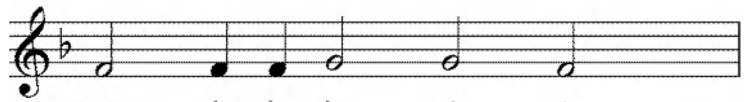
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) われらもろもろ うれい いかり あやうき まぬが ため しゅ いの
我等 諸 の憂愁と忿怒と危難とを 免 るるが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも
神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い 憐 み 護れよ、

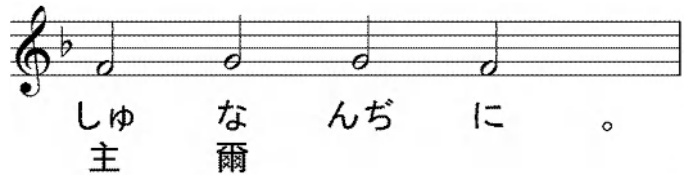


しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ
至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

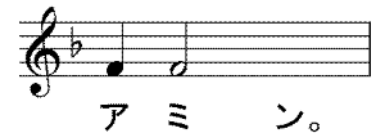
しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら
諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

いのちもつ 生命を以て、
かみいたく 神に委託せん、



司祭) (黙誦：主我が神よ、爾の權柄は像り難く、光榮は測り難し、爾の仁慈は限り無く、仁愛は言い難し、求む主宰よ、爾の慈憐に因りて、親ら我等と此の聖堂とを眷み、我等及び我等と偕に禱る者に爾の豊なる恩澤と爾の愛憐とを施し給え、)

司祭) 蓋、凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世世に、



【 第一アンティフォン 第46聖詠 】

ばんみんよ、 てをうち、 よろこびのこえをもつてか
萬民 手拍 歡 聲 以 神

みによべ。
呼

きゅうせ いしゅよ、 しょうしんぢよのきとうによつて
救世 主 生神女 祈禱 因

われらをすくいたまあえ。
我等 救 給

けだししじょうのしゅはおそるべくして、ぜんちを
蓋 至上 主 畏 全地

おさむるだいおうなり。
治 大 王

きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって
 救世主 生神女 祈禱 因

われらをすくいたまえ。
 我等 救 給

かれはしょみんをわれらにしたがわせ、しょぞくを
 彼 諸民 我等 従 諸族

われらのそっかにしたがわせたがり。
 我等 足下 従

きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって
 救世主 生神女 祈禱 因

われらをすくいたまえ。
 我等 救 給

かみはよぶこえにともなわれてのぼり、しゅは
 神 呼 聲 伴 上 主

らっぱのこえにともなわれてのぼれり。
 角 聲 伴 上

きゅうせ いしゅよ、しょうしんぢよのきとうによって
 救世主 生神女 祈禱 因

われらをすくいたまえ。
 我等 救 給

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

いつもよよに、アミン。
 何時 世 世

きゆう せ いしゅよ 、しょうしんぢよのきとうによつて
 救 世 主 生 神女 祈 禱 因

われらをすく いたま あ え 。
 我 等 救 給

【 小聯禱 】

司祭) ^{われらまたまたあんわ} 我等復又 ^{しゅ いの} 安和にして主に禱らん、

しゅあわれめよ。
 主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅあわれめよ。
 主 憐

司祭) ^{しせいしけつ いたさんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰、生神女、永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら} 諸聖人を記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の

^{いのち もつ かみ いたく} 生命を以て、ハリストス神に委託せん、

しゅなんぢに。
 主 爾

司祭) (黙誦: ^{しゅわ かみ なんぢ たみ すく およ なんぢ しぎょう ふく くだ なんぢ きょうかい} 主我が神よ、爾の民を救い、及び爾の嗣業に福を降し、爾が教會

^{じゅうまん まも なんぢ どう び あい もの せい なんぢ しんせい ちから} の充滿を守り、爾が堂の美なるを愛する者を聖にせよ、爾が神聖の力

^{もつ かれら こうえい われらなんぢ たの もの のこ なか} を以て彼等を光榮し、我等爾を恃む者を遺す勿れ、)

司祭) ^{けだしけんべいおよ くに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ} 蓋權柄及び國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、

アミン。

【 第二アンティフォン 第47聖詠 】

しゅはおおいにして、わがかみのまちに、その
 主 大 我 神 城 邑 其

せいざんにさんようせらる。
 聖 山 讚 揚

こうえいのうちにのぼりしかみのこよ、
 光 榮 中 上 神 子

われらなんぢにアイルイヤをたてまつるものをす救
 我 等 爾 獻 者

くいたまあえ。
 給

シオンさんはうるわしきたかみにして、そのほっぽ
 山 美 高 處 其 北 方

うにだいおうのまちあり。
 大 王 城 邑

こうえいのうちにのぼりしかみのこよ、
 光 榮 中 上 神 子

われらなんぢにアイルイヤをたてまつるものをす救
 我 等 爾 獻 者

くいたまあえ。
 給

かみはそのすまいにおいてふせぎまもるもの
 神 其 住 所 於 防 護 者

としてしらる。
 知

こう え い の うち に の ぼ り し か み の こ よ 、
 光 榮 中 上 神 子

わ れ ら な ん ぢ に ア リ ル イ ヤ を た て ま つ る も の を す 救
 我 等 爾 獻 者

く い た ま あ え 。
 給

け だ し み よ 、 し ょ お う あ つ ま り て 、 と も に す ぎ
 蓋 視 諸 王 集 借 過

さ れ り 。
 去

こう え い の うち に の ぼ り し か み の こ よ 、
 光 榮 中 上 神 子

わ れ ら な ん ぢ に ア リ ル イ ヤ を た て ま つ る も の を す 救
 我 等 爾 獻 者

く い た ま あ え 。
 給

【 神の獨生の子 】

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 何 時 世 世

か み の ど く せ い の こ な ら び に こ と ば よ 、
 神 獨 生 子 並 言

しせざるものにしてわれらをすくわんがため
 死 者 我 等 救 爲

あまんじてせいなるしょうしんぢよ・えいていどうぢよ
 甘 聖 生 神 女 永 貞 童 女

マリアよりみをと かり、かみのせいをかえ
 身 取 神 性 易

ずしてひととなりじゅうじかにくぎうたれ、
 人 十 字 架 釘

しをもってしをふみやぶりしハリストスカみよ、
 死 以 死 踏 破 し 神 神 聖 子 聖 神 共

せいさんしゃのいつとしてちちとせいしんとと共
 聖 三 者 一 父 聖 神 共

もにさんえいせらるるのしゅよ、われらをす
 讚 榮 主 我 等 救

く いたま あ え 給

【 小聯禱 】

司祭) ^{われらまたまたあんわ} 我等復又 ^{しゅ いの} 安和にして主に禱らん、

しゅあわれ めよ、しゅ あわれ めよ。
 主 憐 主 憐

司祭) ^{かみ なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

^{しせいしけつ} 至聖至潔にして ^{いた} 至りて ^{さんび} 讚美たる ^{われら} 我等の ^{こうえい} 光榮の ^{ぢよさい} 女宰、^{しょうしんぢよ} 生神女、^{えいていどうぢよ} 永貞童女マリアと、

^{しよせいじん きおく} 諸聖人を記憶して、^{われらおのれ} 我等己の ^{みおよ} 身及び ^{たがい} 互に ^{おのおの} 各の ^み 身を以て、^{もつ} 並に ^{ならび} 悉く ^{ことごと} の我等の ^{われら}

り、かれらなんぢのしゆくふくによりて、なんぢ
 彼等爾 祝 福 依 爾
 がかみのこ、せかいのしゆくざいしゆたるを
 神 子 世 界 贖 罪 主
 たしかめられしによる。
 確 因
 わがくちはえいちをいだあし、わがこ
 我 口 睿 智 出 我 心
 こころのおもいはちしきをいださん。
 思 智 識 出
 ハリストスわれらのかみよ、なんぢはこうえい
 我 等 神 爾 光 榮
 のうちにてんにのぼり、せいしんをつかわす
 中 天 升 聖 神 遣
 をやくして、もんとをよろこばしめたまえ
 約 門 徒 喜 給
 り、かれらなんぢのしゆくふくによりて、なんぢ
 彼等爾 祝 福 依 爾
 がかみのこ、せかいのしゆくざいしゆたるを
 神 子 世 界 贖 罪 主
 たしかめられしによる。
 確 因
 われみみをかたぶけてたとえをきいき、
 我 耳 傾 比 喩 聴 い き、

ことをもってわがなぞをとか
 琴以我隠語解ん。
 ハリストスわれらのかみよ、なんぢはこうえい
 我等神爾光榮
 のうちにてんにのぼり、せいしんをつかわす
 中天升聖神遣
 をやくして、もんとをよろこばしめたまえ
 約門徒喜給
 り、かれらなんぢのしゆくふくによりて、なんぢ
 彼等爾祝福依爾
 がかみのこ、せかいのしゆくざいしゅたるを
 神子世界贖罪主
 たしかめられしによる。
 確因
 わがかなんのひ、われをはくがいするものあ
 我患難日我迫害者惡
 くわれをめぐるとき、われなんぞお
 我環時我何懼
 それん。
 ハリストスわれらのかみよ、なんぢはこうえい
 我等神爾光榮
 のうちにてんにのぼり、せいしんをつかわす
 中天升聖神遣

を や く し て 、 も ん と を よ ろ こ ば し め た ま え
 約 門 徒 喜 給
 り 、 か れ ら な ん ぢ の し ゅ く ふ く に よ り て 、 な ん ぢ
 彼 等 爾 祝 福 依 爾
 が か み の こ 、 せ か い の し ゅ く ざ い し ゅ た る を
 神 子 世 界 贖 罪 主
 た し か め ら れ し に よ る 。
 確 因

司祭) (黙誦：主^{しゅさい}宰^{しゅ}・主^{われら}・我等^{かみ}の神^{しよてん}、諸^{てんしおよ}天^{てんししゅ}に天使^{ひんきゆう}及び^{ぐんたい}、天使^た首^たの品^{しゅさい}級^{しゅ}と軍隊^{われら}とを立て
 て爾^{なんぢ}が光^{こうえい}榮^{ほうじしゃ}の奉^{もの}事^{もと}者^{われら}となしし者^いよ、求^{ともな}む我^か等^{われら}の入^かる^{われら}に伴^いいて、彼^{われら}の我^{われら}等^{われら}と
 とも^{とも}つと^{とも}、共に^{なんぢ}爾^{しぜん}の至^{さんえい}善^{せい}を讚^{せい}榮^{てん}する聖^い天使^{いた}等^{たま}の入^{けだし}る^{およ}を致^{およ}させ給^{およ}え、蓋^{およ}、凡^{およ}
 そ光^{こうえい}榮^{そんき}尊^{ふく}貴^{はい}伏^{なんぢ}拝^{ちち}は爾^こ父^{せい}と子^{しん}と聖^き神^{いま}に歸^{いつ}す、今^{よよ}も何^{よよ}時^{よよ}も世^{よよ}に、)

司祭) 睿^{えいち}智^{つし}、肅^{つし}みて立^たて、

【 聖入の句 】

か み は よ ぶ こ え に と も な わ れ て の ぼ
 神 呼 聲 伴 升
 り 、 し ゅ は ら っ ぱ の こ え に と も な わ れ て の ぼ
 主 角 聲 伴 升
 れ り 。

【 升天祭のトロパリ 第4調 】

ハ リ ス ト ス わ れ ら の か み よ 、 な ん ぢ は こ う え い
 我 等 神 爾 光 榮

の うち に てん に の ぼ り 、 せ い しん を つ か わ す
 中 天 升 聖 神 遣
 を や く し て 、 も ん と を よ ろ こ ば し め た ま え
 約 門 徒 喜 給
 り 、 か れ ら な ん ぢ の し ゅ く ふ く に よ り て 、 な ん ぢ
 彼 等 爾 祝 福 依 爾
 が か み の こ 子 、 せ か い の し ゅ く ざ い し ゅ た る を
 神 子 世 界 贖 罪 主
 た し か め ら れ し に よ る 。
 確 因

【 升天祭のコンダク 第6調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い しん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今
 い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 何 時 世 世
 ハ リ ス ト ス わ れ ら の か み よ 、 な ん ぢ は わ れ ら に お け
 我 等 神 爾 我 等 於
 る て い せ い を な し お え て 、 ち の も の を てん に
 定 制 を 爲 お 畢 地 者 を 天
 あ わ せ て 、 こ う え い の う ち に の ぼ り た
 合 光 榮 中 升
 れ ど も 、 い づ こ よ り も は な れ ざ り き 、 す
 何 處 離 乃

なわちわかるるなくとどまりて、なんぢ
別 留 爾
をあいするものによぶ、われなんぢらとと
愛 者 呼 我 爾 等
もにす、ひとのなんぢらにてきする
人 爾 等 敵
な あ し

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拜せられ、萬物を無より有と
なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
ねがものちえめいごあたつみおこなものすそのすくいためつうかい
願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行おう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
たわれらいやふとうなんぢしよぼくこときおいなんぢせい
を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
さいだんこうえいまえたなんぢとうぜんふくはいさんえいたてまつたもの
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拜讚榮を奉るに堪うる者と
しゅさいなんぢみづかわれらざいにんくちせいさんうたうなんぢじんじ
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
もつわれらのぞわれらおよじゆうじゆうつみゆるわたましいからだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
せいわれらしょうがいぜんこうもつなんぢつとえたませいしょう
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる生
しんぢよこせいなんぢよろこびなしよせいじんきとうよ
神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる
 じょうせいのものよ、われらをあわれめ
 常生者の我等を憐
 よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖なる神、聖なる勇毅、聖
 なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 常生者の我等を憐
 めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖なる神、聖なる勇毅
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖常生者の我等を憐
 れめよ。こうえいはちちとこせいしん
 光栄父と子聖神
 にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸今何時世世に、アミン。
 せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖常生者の我等を憐
 れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖なる神、聖なる勇
 き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 毅聖常生者の我等を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國

の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 プロキメン 提綱 第7調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、神よ、願わくは爾は諸天の上に擧げられ、爾の光榮は全地を蔽わん、

か み よ 、 ね が わ く は なん ぢ は し ょ て ん の う え に あ
神 願 爾 諸 天 上 擧
げ ら れ 、 なん ぢ の こ お え い は ぜ ん ち を
爾 光 榮 は 全 地
お お わ ん 。
蔽

誦經) 我が心備れり、神よ、我が心備れり、我歌いて讚榮せん、

か み よ 、 ね が わ く は なん ぢ は し ょ て ん の う え に あ
神 願 爾 諸 天 上 擧
げ ら れ 、 なん ぢ の こ お え い は ぜ ん ち を
爾 光 榮 は 全 地
お お わ ん 。
蔽

誦經) 神よ、願わくは爾は諸天の上に擧げられ、

なん ぢ の こ お え い は ぜ ん ち を お お わ ん 。
爾 光 榮 は 全 地 蔽

【 アポστόロス 使徒經 1 端 聖使徒行實 1 章 1～12 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒行實の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) フェオフィルよ、我第一の書を作りて、凡そイイススの始めて行いし所、誨えし所を録して、其選びたる使徒に、聖神に因りて、命を降して、天に上りし日に迄り。彼は苦を受けし後、多くの確證を以て、彼等の前に己の活くるを視し、四十日の間彼等に現れて、神の國の事を語り。遂に彼等を集めて、之に命じて曰えり、イエルサリムを離れずして、爾等が我に聞きし所の、父の許約せし者を待て。蓋イオアンは水を以て洗を授けたり、爾等は日久しからずして、聖神に由りて洗を受けん。是に於て彼等集りて、彼に問いて曰えり、主よ、爾は此の時に於てイズライリの國を興すか。彼は之に謂えり、父が己の權内に置きし時及び期は爾等の知るべき所に非ず。しかれども聖神の爾等に臨まん時、爾等能力を受けて、イエルサリム、全イウデア、サマリヤ、及び地の極に至るまで、我が爲に證者と爲らん。此を言いて後、彼等の目の前に擧れり、雲彼を接けて、彼等に見えざらしめたり。其升れる時、彼等天を仰ぎたるに、視よ、二人白衣にして彼等の前に立ちて曰えり、ガリレヤの人よ、何ぞ天を仰ぎて立てる、爾等より天に上りし此のイイススは、爾等が其天に升るを見し如く、是くの如く復來らん。其時彼等は橄欖山と名づくる山よりイエルサリムに歸れり、此の山はイエルサリムに近くして、安息日に行く程なり。

(比較用 口語訳) テオピロよ、わたしは先に第一巻を著わして、イエスが去り、また教えはじめてから、お選びになった使徒たちに、聖霊によって命じたのち、天に上げられた日までのことを、ことごとくした。イエスは苦難を受けたのち、自分の生きていることを数々の確かな証拠によって示し、四十日にわたってたびたび彼らに現れて、神の國のことを語られた。そして食事を共にしているとき、彼らにお命じになった、「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」。さて、弟子たちが一緒に集まったとき、イエス

に問うて言った、「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのは、この時なのですか」。彼らに言われた、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない。ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう」。こう言い終ると、イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった。イエスの上って行かれるとき、彼らが天を見つめていると、見よ、白い衣を着たふたりの人が、彼らのそばに立っていて言った、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」。それから彼らは、オリブという山を下ってエルサレムに帰った。この山はエルサレムに近く、安息日に許されている距離のところにある。。

【 アリルイヤ 第2調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{かみ よ こえ ともな のぼ しゅ らっぱ こえ ともな のぼ} 神は呼ぶ聲に伴われて升り、主は角の聲に伴われて升れり、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{ばんみん て う よろこび こえ もつ かみ よ} 萬民よ、手を拍ち、歡の聲を以て神に呼べ、

アリル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、

^{くら}に^{またかれら}食^いえり。又^{われな}彼^{おなんちら}等に^{とも}謂^あえり、我^{とき}猶^{なんちら}爾^{かた}等^{りつ}と^{りつ}偕^{りつ}に^{りつ}在^{りつ}りし^{りつ}時^{りつ}、爾^{りつ}等^{りつ}に^{りつ}語^{りつ}りて、^{りつ}モイ^{りつ}セイ^{りつ}の^{りつ}律^{りつ}
^{ぼう}法^{しよ}、^{しよ}諸^{げん}預^{しゃ}言^{およ}者^{せい}及^いび^{せい}聖^い詠^いに、^{われ}我^さを^{しる}指^{こと}して^{みな}録^{かな}され^いし^{すな}事^{わち}、^{これ}皆^{これ}應^{これ}う^{これ}べ^{これ}し^{これ}と^{これ}云^{これ}い^{これ}し^{これ}は、^{これ}乃^{これ}是^{これ}な^{これ}
^{その}り^{とき}。其^{かれら}時^ち彼^{しき}等^{ひら}の^{せい}智^{しよ}識^{さと}を^{また}啓^いきて、^か聖^{しる}書^{しる}を^か悟^{しる}らし^かめ^{しる}たり。又^か彼^{しる}等^{しる}に^か謂^{しる}えり、^か斯^{しる}く^{しる}録^{しる}され^{しる}たり、
^し而^こして^か斯^くハ^かリ^かス^かト^かス^かは^く苦^くを^う受^うけ、^だ第^だ三^{さん}日^{じつ}に^し死^しよ^しり^し復^ふ活^くす^かべ^かかり^かき、^か且^か其^か名^なに^よ因^よりて、
^{かい}悔^{かい}改^{かい}と^{しよ}諸^{ざい}罪^{ゆる}の^{ゆる}赦^{ゆる}とは、^はイ^はエル^たサ^みリ^{つた}ム^{つた}よ^{つた}り^{つた}始^{つた}めて、^{なん}民^{ちら}に^{これ}傳^{これ}え^{これ}ら^{これ}る^{これ}べ^{これ}き^{これ}なり。爾^{これ}等^{これ}は^{これ}此^{これ}等^{これ}の^{これ}
^{こと}事^{しよ}の^{しよ}證^{しよ}者^{しよ}なり。視^みよ、^{われ}我^わは^わが^わ父^{ちち}の^き許^き約^きせ^きし^き者^きを^も爾^{もの}等^{なんちら}に^つ遣^{かわ}さん、^{なんちら}爾^{なんちら}等^{なんちら}イ^{なんちら}エル^{なんちら}サ^{なんちら}リ^{なんちら}
^{まち}ム^おの^う城^えに^ち居^ちりて、^う上^えよ^ちり^ち能^き力^きを^い衣^いす^いる^いに^か迄^かれ^か。イ^かス^かス^か彼^そ等^とを^ひ外^きに^い率^いいて、^いヴィ^いタ^いニ^いヤ^いに^い至^い
^てり、^あ手^あを^あ舉^あげて^あ彼^あ等^あに^あ祝^あ福^あせ^あり。祝^あ福^あす^ある^あ時^あ、^あ彼^あ等^あを^あ離^あれ、^あ舉^あげ^あら^あれ^あて、^あ天^あに^あ升^あれ^あり。
^か彼^か等^か之^かを^か拜^かし、^か大^かに^か喜^かび^かて、^かイ^かエル^かサ^かリ^かム^かに^か歸^かり、^か恒^かに^か殿^かに^か在^かりて、^か神^かを^か頌^か美^か祝^か
^{さん}讚^{さん}せ^{さん}り、^{さん}ア^{さん}ミ^{さん}ン。
 * * * * *

(比較用 口語訳) その時、復活したイエスが彼らの中にお立ちになった。〔そして「やすかれ」と言われた。〕彼らは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った。そこでイエスが言われた、「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。〔こう言って、手と足とをお見せになった。〕彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていると、イエスが「ここに何か食物があるか」と言われた。彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた。それから彼らに対して言われた、「わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」。そこでイエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらの事の証人である。見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」。それから、イエスは彼らをベタニヤの近くまで連れて行き、手をあげて彼らを祝福された。祝福しておられるうちに、彼らを離れて、〔天にあげられた。〕彼らは〔イエスを拝し、〕非常な喜びをもってエルサレムに帰り、絶えず宮にいて、神をほめたたえていた。

* * * * *

しゅよ、こ う え い は なんぢに き し 、 こ う え い
 主 光 栄 爾 に き し 、 主 光 栄

は なんぢに き す 。
爾 歸

※聖体礼儀③ へ